

敦煌故事賦「燕子賦」訳注(1)

—ツバメ夫婦、

スズメ一家に新居を乗っ取られる—

田村 祐之

姫 路 獨 協 大 学

国際言語文化論集 第5号 抜刷

2024年2月 発行

敦煌故事賦「燕子賦」訳注(1)

ー ツバメ夫婦、スズメ一家に新居を乗っ取られるー

田村 祐之

筆者は本学の言語教育研究科で「中国文化研究Ⅲ」の授業を2015年度から担当してきた。授業内容は近代漢語文献の読解で、おもに劉堅編著『近代漢語読本』^①に収められたテキストを読解していた。『近代漢語読本』は、南北朝から明代までの各種文献から、近代漢語研究や学習に資する文献を選び注を付しており、敦煌文献の「燕子賦」^②も収められている。授業では他のテキストとともに、ほぼ毎年この「燕子賦」も取り上げて読解していた。「読解」とはいえ非常に難解なテキストであり、例年おおむね大意を取るのが精いっぱいであったが、それでも各年度の受講生たちは必死に読解に挑戦し、ときにはこちらの読みを超える素晴らしい読解を提供してくれることもあった。

来年度から、「中国文化研究Ⅲ」を担当することはなくなる。そこで、これまで受講生たちとともに読解してきた「燕子賦」のメモを整理し、日本語訳と訳注を施して、「中国文化研究Ⅲ」の授業の総括としたい。

その前に、「燕子賦」もその中に含まれる敦煌文献について、そして「燕子賦」の研究状況などについて簡単に説明する。

1. 敦煌文献について

敦煌文献（遺書・写本・文書などとも呼ばれる）は、清朝末期の1900年に、敦煌にある石窟寺院、莫高窟から発見された文書群の総称である。発見されて間もなく、当時中央アジア各地を探検調査していたイギリスの東洋学者オーレル・スタインやフランスの東洋学者のポール・ペリオらにより、大量の文献が買い取られヨーロッパに持ち帰られた。清朝政府も遅ればせながら1910年に、残存していた文献を北京に移送した。また日本の大谷探検隊やロシアのオルデンブルク探検隊により本国に持ち帰られた文献もあり、敦煌文献は世界各地の図書館や博物館に分散所蔵されている。

敦煌文献の内容は、4世紀から11世紀頃に作成された文書、絵画、刺繍など

である。その9割が漢語仏典および仏教関連文献だが、他にチベット語・サンスクリット語・コータン語・クチャ語・ソグド語・西夏語・ウイグル語・モンゴル語などで書かれた仏教以外の経典（ゾロアスター教、マニ教、景教など）、儒家の典籍、日常でやり取りされた文書（法令、売買契約書、土地台帳、私塾の教科書など）、文学作品なども含まれている。^③文学作品のうち「変文」と呼ばれる講唱文芸作品など78種を集成校訂したのが王重民等編『敦煌変文集』八卷（人民文学出版社、1957）である。敦煌変文の収集整理校訂作業はその後もさまざまな研究者により続けられ、潘重規『敦煌変文新書』（『敦煌學叢書』第6種、中国文化大学中文研究所敦煌学研究会、1983～84）、黄征・張涌泉校注『敦煌変文校注』（中華書局、1997）などが刊行されている。

2. 故事賦「燕子賦」について

敦煌文献に含まれる文学作品の中に、「故事賦」と呼ばれるものがある。故事賦について、張鴻勛氏は以下のように説明する。

敦煌に保存されていた唐代の故事賦は、『敦煌変文集』に収められている。「～賦」と名付けられたものもあれば、賦ではなく「～書」「～論」と名付けられたものもあるが、いずれも長いものではない。使われる言葉はおおむね当時の口語であり、俗語や俗諺が多用される。句形は四言・六言が主だが、それから外れる部分もある。大部分は二句ごとに押韻し、それが五、六度繰り返されてから換韻する。このような句形と押韻によって、現代の「快書」^④のような、速いテンポで臨機応変、一气呵成に流れ出すような独特なリズム効果を生み出している。これは「語り」と「うた」をつなぎ合わせた「韻誦体」である。^⑤

また三瓶はるみ氏は故事賦について「韻文と散文を交え、諧謔と諷刺に富み、中には二者乃至三者の対話によって物語が展開する、ストーリー性の高い作品も見られる」^⑥と述べる。今回訳注を行う「燕子賦」も故事賦の一つである。

「燕子賦」には内容がやや異なる二種類の鈔本があり、甲本、乙本と称される^⑦。両本に共通して登場するのは擬人化されたツバメ、スズメ、鳳凰であり、ストーリー面では「ツバメの夫婦が建てた新居をスズメに乗っ取られたうえ暴力を振るわれ、鳳凰にスズメの無法を訴え出る」という点が共通している。異なる点についてみると、甲本はおおむね四言・六言で構成されており、ツバメ、スズメ、鳳凰のほか、さまざまな擬人化された鳥たちが登場し、ストーリーも

敦煌故事賦「燕子賦」訳注(1)

起伏に富んでいる。乙本はおおむね五言で構成されており、登場人物はツバメ、スズメ、鳳凰の三者のみで、基本的にツバメとスズメの会話で話が進められていく。両本とも、最後にツバメとスズメは和解する。三瓶氏によれば、乙本は唐代に流行した宗教教義の論争である「論議」との関連が指摘されている。論議は儒教、仏教、道教の三者（もしくはこのうちの二者）の代表が、各自の宗教教義の優劣を争うものである。乙本ではツバメが仏教的立場、スズメが道教的立場から発言し争う。いっぽう甲本では宗教的色彩はあまり感じられない。

現存する鈔本は、甲本は完本が1種、残巻が7種、ほか断片が数種類ある。乙本は完本1種のみである。

3. 「燕子賦」の日本での紹介・研究の状況

「燕子賦」については金岡昭光責任編集『講座敦煌9 敦煌の文学文献』（大東出版社、1990）のI-3「散文体類」に、甲乙両本の概要と甲本の部分訳が載せられている。

乙本については、以下の研究・翻訳がある。

三瓶はるみ「敦煌故事賦「燕子賦」(乙本)について」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第27号1～16ページ、2008年4月)

2014～2016年度科学研究費(基盤研究(C))「日中説話比較に向けての敦煌文献説話研究」(研究代表者:伊藤美重子〔お茶の水大学基幹研究院〕)研究成果報告書『敦煌説話文献訳注稿』(2017年3月)

「茶酒論、燕子賦(乙本)、韓朋賦、晏子賦、葉浄能詩、舜子至孝変文、王陵変文の原文・日本語訳・注釈、鈔本リスト、先行研究・参考文献リスト、作品概要や研究論文、日中の関連資料を載せた。」(研究成果概要報告書より)

甲本については、管見の限り、前述した金岡氏1990の部分訳以外に日本語訳されたものはない。冒頭で、個人的な理由により「燕子賦(甲)」の訳注を行う旨を述べたが、敦煌故事賦について理解を深めるためにも、いまだ完訳のない「燕子賦(甲)」の訳注を行うことは意味があると考えられる。

4. 「燕子賦(甲)」訳注(1)ツバメ夫婦、スズメ一家に新居を乗っ取られる

以下に「燕子賦(甲)」訳文および訳注を載せる。今回訳出したのは全体の十分の一ほどで、ツバメ夫婦が新居を建てるが、留守中にスズメ一家に新居を乗っ

取られ、ツバメの夫が抗議したところスズメ一家に暴力を振るわれる場面である。訳出については、以下に定めた凡例に従う。

〔凡例〕

- ・本文テキストは黄征、張涌泉校注『敦煌変文校注』に収録された「燕子賦（一）」を使用する（以下『校注』と表記）。表示できない字は、漢字構成記述文字（ $\square\square\square\square\square\square\square\square\square\square$ ）を示し、その後ろの〔 〕内に字の要素を並べて示す。例えば要素を横に組み合わせる場合は「 $\square\square$ 〔木寸〕」（＝村）、縦に組み合わせる場合は「 \square 〔宀女〕」（＝安）となる。
- ・原文を基本的に二句ごとに区切って掲げ、その下に訳文を示す。
- ・訳注では必要に応じて、以下の校注本などを参照する。
 - 劉堅編著『近代漢語読本（修訂版）』→『読本』と表記
 - 項楚『敦煌変文選注 増訂本』（中華書局、2006；『項楚學術文集』、中華書局、2019）→『選注』と表記
 - 蔣礼鴻『敦煌變文字義通釈（増補定本）』（上海古籍出版社、1997）→『通釈』と表記
- ・訳注で他の文献から引用する場合、漢語原文をダブルクォーテーションで囲んで示す。必要に応じて日本語訳を〔 〕で原文の後ろに付す。

燕子賦

仲春二月，雙燕翱翔。

春半ばの二月、ツバメの夫婦が飛び回る。

欲造宅舍，夫妻平章¹。

家を建てようとして、夫婦はあれこれ話し合う。

東西步度²，南北占詳³。

東西に歩いて土地を測り、南北を見て吉凶を占う。

但避將軍、太歳⁴，自然得福無殃。

將軍、太歳を避けさえすれば、おのずと殃わざかいは来ずに福が来る。
取⁵高頭之規⁶，壘泥作窟⁷；

高い梢の枝を取ってきて、泥を塗り重ねて巣をつくる。

上攀梁使⁸，藉草為床。

梁を渡して屋根を葺き、草を敷いて床を作る。

安不離危⁹，不巢於翠幕¹⁰；

安全と危険は隣り合わせ、見晴らしよくても天幕の上には巢作りしない。

卜勝¹¹（而）¹²處，遂托虹梁¹³。

眺めのよい吉祥の地に新居を建て、虹の形の梁を建てる。

鋪置纔了，暫往坻塘¹⁴。

家具をようやく据え付けて、田んぼの畔で一休み。

乃有黃雀¹⁵，頭腦峻削¹⁶。

そこに黄色いスズメがやってきた、こいつは頭がよくて立ち回りがうまい。

倚街傍巷¹⁷，為強凌弱。

裏通りを住处とし、暴力ふるって弱い者をいじめてばかり。

睹燕不在，入來咬掠¹⁸。

ツバメの不在を見澄まして、空き巣しようと（ツバメの新居に）入り込む。

見他宅舍鮮淨，便即穴白¹⁹占着²⁰。

新築ピカピカなのを見て、これはチャンスと居座りを決める。

婦兒男女²¹，共為歡樂。

スズメは妻や子供を呼び寄せて、いっしょに楽しく過ごす。

自誇樓羅²²：「得伊造作²³。

スズメは頭の良さを自慢する、「あいつの新居をいただいた。

耕田人打兔，蹠履人吃隴²⁴。

『百姓がウサギを捕まえ、やんごとなき人がそのスープをいただく。』

古語²⁵分明，果然不錯。』

…と昔の人も言ってるが、全くその通りだな。』

硬努²⁶拳頭，偏脫胳膊²⁷。

スズメはぐっと拳を突き出して、片肌脱いでみせる。

「燕若入來，把棒撩²⁸脚。

「ツバメのやつが入ってきたら、棒を持って足を払ってやれ。

伊且²⁹單身獨手，嚶³⁰我阿莽³¹□□[薛女]斫³²？

ましてあちは独りだけ、俺が手を出すまでもない。

更被唇口囁嚶³³，與你到頭尿卻³⁴。』³⁵

あいつがそれでももごもご言うなら、俺の小便ぶっかけてびしゃびしゃにしてやるぞ。』

言語未定，燕子即迴，

といい終わらぬうちに、ツバメが戻ってくる。

踏地³⁶叫喚，「雀兒出來！」

ツバメは足を踏み鳴らし、「スズメ、出てこい！」と呼ばわる。

不問好悪³⁷，拔拳即差（搓）³⁸，

スズメはよいも悪いも尋ねずに、拳をかまえて殴りかかる。

左推右聳³⁹，剗（挽）⁴⁰耳擱顛⁴¹。

ツバメを左右から手で押し込み、耳をひねり頬をぶつ。

兒捻脚拽⁴²，婦下口□□[齒來]⁴³。

子供らはツバメの足を引っ張り、妻はくちばしで噛みつく。

鸚子被打，可笑⁴⁴屍骸⁴⁵。

燕は殴られ噛みつかれて、まったくひどいありさま。

頭不能舉，眼不能開。

頭を上げることが、目を開けることもできない。

（以下続）

〔本文注〕

- ① 上海教育出版社、1985年；修訂版、1995年。
- ② 書中では説明されていないが、収録されているのは「燕子賦（甲）」（後述）である。
- ③ 池田温『敦煌文書の世界』（歴史学叢書、名著刊行会、2003）および郝春文著、高田時雄監訳、山口正晃訳『よみがえる古文書—敦煌遺書』（東方書店、2013）などを参照。
- ④ 中国の伝統芸能の一つで、竹板や鉄片をたたいてリズムを取りつつ速いテンポで歌い語る語り物。
- ⑤ 張鴻勛『敦煌俗文学研究』（甘肅教育出版社、2002）89ページ。原文は以下の通り。
“敦煌保存的唐代故事賦，收入了《敦煌变文集》。其中既有以賦名篇者，也有未以賦名，而是以“書”、“論”名篇，但都篇幅不长，语言基本为当时口语，充满俚语俗谚；句式以四、六言为主，杂以部分散说；大体上隔句押韵，五六个韵脚后就另换别韵，这样的句式和韵式，构成了一种特有的节奏效果，节拍急促，灵活多变，一滚而出，类似现今的快书，是介乎说与唱之间的一种韵诵体。”
- ⑥ 三瓶はるみ「敦煌故事賦「燕子賦」（乙本）について」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第27号1～16ページ、2008年4月）
- ⑦ 『敦煌变文校注』ではそれぞれ「《燕子賦》（一）」「《燕子賦》（二）」と称する。

〔訳注〕

- 1 平章：『校注』『選注』ともに“商量”〔話し合う、相談する〕とする。
- 2 歩度：『校注』は“歩行測度”〔歩いて距離を測る〕とする。『選注』は“營建前行測量距離，以推算禍福。”〔建物を建てる前に距離を測り、禍福を推算する〕とする。『読本』は“歩度，度，音 duó。歩度，以走歩來量度。”〔「歩度」の「度」は「duó」と発音する。「歩度」は、歩いて距離を測る〕とする。
- 3 占詳：土地の吉凶を占う。『校注』は“江藍生校：“應作『占相』，義為察看相貌、地形等，以斷吉凶禍福。”〔江藍生校注に『『占相』とすべきである。表情や地形などを観察して、吉凶禍福を判断することを意味する』とある〕とする。「江藍生校」は甘肅省社会科学院文学研究室編『閩隴文学論叢』『敦煌変文専集』（甘肅人民出版社、1983）所載の江藍生「敦煌写本《燕子賦》二種校注（之一）」を指す。『読本』は“察看地勢以斷吉凶。此二句言營造宅舍前之準備。”〔地勢を観察して吉凶を判断する。この二句は家を建てる前の準備について言っている〕とする。
- 4 將軍、太歳：太歳は古代天文学において、歳星（木星）と線対称の位置を動くように設定された、架空の惑星。暦の計算などに利用されるうち神格化され、方位に関する吉凶を司る神とされた。家の新築、引っ越し、旅行などのときにはその方角を避けねばならないことが、『荀子』『抱朴子』『論衡』などに見える。

將軍は「五道（五盗）將軍」のことか。『冊府元龜』卷八百九十三「総録部・夢徴第二」に“北齊崔季舒為左光祿大夫。妻晝，魘寤云：‘見人長一丈遍體黑毛，欲來逼已。’巫曰：‘此是五道將軍，入宅者不祥。’俄被誅。”〔北齊の崔季舒が左光祿大夫だったときのこと。崔季舒の妻が昼寝していて、うなされて目覚め、言った。「背だけ一丈もある毛むくじらの人が、私に迫ってきたのです。」占い師が言った。「それは五道將軍です。家に入ってくるのは不吉です。」それからまもなく崔季舒は誅殺された〕とあり、家に入ると「不祥」である存在としてその名が見える。

敦煌文献では例えば『校注』に引く『宅経』に“又此二宅修造，唯有天德、月德、天道到即修之，不避將軍、太歳、豹尾、黄幡、黑方及五姓宜忌，但隨順陰陽二氣焉。”（『校注』は「天道到」の「到」を衍字とする）として、將軍と太歳が現れる。『宅経』は住居の風水に関する典籍で、住居を修築する際の方位方向の選択、新築の際の鉄入れの時間などを推算する方法を記す。敦煌文献には『五姓宅経』など21点が残されている。（郝春文前掲書を参照）

- 5 取：『読本』『選注』は「～に（向かって）」の意に解する。『校注』は“此處

「取」即擇取、裁取之意。”として、「取る」の意に解する。次注も参照。

- 6 規：『読本』は、音が近似する“居”〔住处、住まい〕と解釈する。『校注』は巢の土台にする木の枝とする。

この句を解釈するに、『読本』に従えば「高い木の上の巢に向かって」となり、『校注』に従えば「高い木の梢の枝を取る」となる。この句の前段では巢をつくる場所を選び、後段では泥をこねたり梁を建てたりして実際に巢を作っているの、この句は『校注』に従い「高い木の梢の枝を取る」と解釈するのがよいと考えた。

- 7 窟：地面や崖にある洞穴。本来、ツバメは樹上や人家の軒下など高所に泥や枯草で巢を作るが、「燕子賦」においては吉祥の地を選び、屋根を葺いたりするなど、地上に住居を建てているようにも見える。また「燕子賦」甲乙両本いずれにおいても、“窟”をスズメの住居の意で使っている。さらに甲本の後段で、鳳凰の部下の□□〔包鳥〕鷓〔ミソサザイ〕がスズメの逮捕に急行し、スズメ一家が乗っ取ったツバメの新居に到着した場面に「行至門外，良久立聽。正聞雀兒，窟裏語聲。」〔（新居の）入口までくると、しばらく立ち聞きする。ちょうどスズメが“窟”の中で話すのが聞こえた〕とあり、入り口を備えた住居であることがわかる。「燕子賦」の登場人物は擬人化された鳥たちであり、ツバメの“窟”は高所に作られた巢ではなく、地面に建てられた家と考えるのがよいと思う。

- 8 梁使：建物の梁。“使”字に建物の梁を指す用法はない。『選注』は“棟”の誤とし、元稹「君莫非」詩の“燕在梁棟，鼠在階基”〔ツバメは梁に住み、ネズミは床下に住む〕を傍証として引く。『校注』は「燕子賦」の他の鈔本でこの部分を“京事”としており、“使”“事”はほぼ同音であることから、この二字と音の近い“樞”（建物の梁、音は所宜切）と解すべきとし、『列子』「湯問」の“餘音繞梁樞，三日不絕。”〔（美しい歌声の）余韻は梁の回りをめぐり、三日の間消えることがなかった〕を引いて傍証とする。いずれにせよ、二字で建物の梁を指す語となる。

- 9 安不離危：『校注』が“「安不離危」即老子「禍福相倚」之意，與下句「不巢於翠幕」語意連貫。”〔「安不離危」は『老子』の「禍福相倚」（禍と福は相互に訪れる）の意であり、下句の「不巢於翠幕」と文意が連なる。〕とするのに従い、安全と危険は隣り合わせ、と解した。

- 10 不巢於翠幕：『校注』は『左伝』襄公二十九年の“夫子之在此也，猶燕之巢于幕上”〔あなたがここにいることは、ツバメが天幕の上に巢をつくるようなものです〕や南朝梁の沈君攸の樂府詩「双燕離」にある“雙入幕，雙出帷。秋風

去，春風歸。幕上危，雙燕離”〔ツバメはつがい得天幕に作った巢に出入りする。秋風が吹くと渡っていき、春風が吹くと帰ってくる。でも天幕が片づけられると巢は壊れてしまい、つがいのツバメは別れ別れになってしまう〕などを引いて、ツバメが天幕の上に巢をつくることを、危機的状況にあることの比喩とする。

『読本』は“不”を衍字とする。ここまで一句四言であることを考えると一理あるが、訳注9に引用した『校注』がいうように、前句“安不離危”と文意が連なることを考え、“不”は衍字ではないと解釈した。

¹¹ 卜勝：『読本』は“指上文卜居之事。勝，謂佳勝之處。”〔上述の土地を占うことを指す。「勝」は景勝の地をいう。〕とする。「土地を占うこと」は3段目の“南北占詳”を指す。

¹² 而：『校注』に従い補う。

¹³ 虹梁：アーチ状の梁。「月梁」ともいう。漢代には「虹梁」と呼び、のち「月梁」と呼ぶようになった。(北京市文物研究所編、呂松雲・劉詩中執筆『中国古代建築辞典』中国書店、1992を参照)

¹⁴ 坻塘：田畑の畔。

¹⁵ 黄雀：『選注』は『爾雅』郝懿行義疏を引き“黄鳥”(マヒワまたはコウライウグイス)のこととするが、「燕子賦」後段で“雀兒”(スズメ)と書かれていることにも言及している。マヒワもコウライウグイスも渡り鳥である。後段、鳳凰の前でツバメとスズメが論争する場面で、スズメはツバメを租税逃れのため土地を捨て逃亡した農民だとして非難するが、これはツバメの渡りの習性を、土地を捨て逃亡したことになぞらえたものとされる(三瓶氏前掲論文参照)。“黄鳥”(=黄雀)が渡り鳥だとすると、この非難は“黄雀”にも跳ね返ってくることになるので、渡りの習性がないスズメと考えるほうがよいと思われる。

¹⁶ 峻削：山や崖が険しいことを指す。“頭腦峻削”は頭の形がとがっているとも、頭の回転が速くて鋭いとも解釈できるが、後段のスズメの自慢などから後者と考えた。『選注』は“形容脑袋尖，寓有善於鑽營取巧之意。”と、『校注』は“尖。後文有以「他家頭尖」語寫鸚鵡者，正用「尖」字。由「頭尖」可引申出頭腦靈活、善于鑽營之意。”とし、いずれも“善於鑽營”〔頭が良くて立ち回りがうまい〕と解釈する。

¹⁷ 依傍：頼る、当てにする。

¹⁸ 皎掠：『選注』は“剽掠”、『読本』は“傲掠”、『校注』は“掇掠”と校し、いずれも財物を強奪する意に解釈する。“剽”“傲”“掇”は字音が近い。

¹⁹ 穴白：『敦煌變文集』所収の原文は“兀白”（断りなく、勝手に）とするが、他の鈔本では“穴白”“宧自”としており、“宧”は“穴”の俗字、“自”は“白”の誤記とする。また晩唐五代に“兀白”の用例が見つからないことから、“穴白”が正しいとする。『校注』に引く江藍生校は“「穴」常作動詞「穿透」講，舊唐書*李密傳：「雖隕首穴胸所甘已。」「白」有「空無所有」義，故「穴白」作「鑽空子」講，引申為「乘機」。”〔「穴」は「つき通す」意の動詞としてよく使われる。『旧唐書』*「李密伝」に「首を斬られ胸をえぐられようとも、甘んじて受けましょう」とある。“白”には「からっぽ、何もない」の意がある。したがって“穴白”は“鑽空子”（機会に乗じて甘い汁を吸う）と解釈でき、さらに引申して“乘機”（チャンスに乗じる）の意となる〕とし、『読本』もこれに従う。

これに対し鄭波は「敦煌變文『燕子賦』詞語詮釈五則」（『漢字文化』2018年第16期）で“兀白”が正しいとし、『水滸伝』『警世通言』などの用例を挙げて傍証とする。

“便即穴白占着”の文意を考えると、『校注』に従えば「そこでチャンスに乗じて居座った」となり、鄭波に従えば「そこで断りなしに居座った」となり、どちらでも文意は通る。ここでは『校注』に従う。

*江藍生校に「舊唐書」とあるが、当該の句は『旧唐書』にはなく『新唐書』に見える。

²⁰ 占着：『校注』は“佔據，住着不走”〔占拠する、とどまって立ち去らない〕とする。

²¹ 婦兒男女：『校注』は“「婦兒」指妻，「男女」即兒女。”とする。孟令妹「“兒”後綴的發展」（『語文学刊』2009年第8期）は、隋唐時代には“兒”の「虚化」が進み、動物、虫、無生物を指す名詞の後につけられる接尾辞“兒”があらわれたとする。敦煌變文では、「燕子賦」に見える“雀兒”のほか、“鴨兒水上學浮沈，任性終無顧戀心。”〔“鴨兒”（カモ、アヒル）は水面で潜ったり浮かんだり、勝手気ままで恩を受けたことなど忘れてしまう〕（長興四年中興殿応聖節講経文）、“觀看之次，忽見一人，劣瘦至甚，藥碗在於頭邊。遂遣車匿問之。「公是何人？」「我是病兒。」「何名病兒？」「地水火風，四大（成身）。一大不調，則百脈病起。此名病兒。」〔（太子が）眺めていると、薬の碗を頭に乘せた、ひどく痩せてみすぼらしい人が目に入った。そこで弟子の車匿をやって尋ねさせた。「あなたはどなた様？」「私は“病兒”です」「なぜ“病兒”という名なのですか？」「人は地水火風の「四大」から出来ていますが、このうち一つのバランスが崩れると、全身の血脈に病気が発生します。これによ

り“病兒”という名なのです]（「太子成道経」）など、「動物／無生物＋兒」の例が散見される。

“婦兒”の“兒”について、まず“婦”は人間を指しており、動物や無生物ではない。「燕子賦」以外の敦煌変文に“婦兒”の用例を含むものはないが、同義語“妻兒”は複数の用例があり、いずれも「妻と子」の意味で用いられている。

“男女”は、『通釈』では“兒女”〔男兒と女兒〕とし、“父母繫心最切，是腹生之子。小時愛護，看如掌上之珠（中略）咽苦吐甘，豈辭嫌厭。迴乾就濕，恐男女之片時不安，洗浣濯時，怕癡騷之等閑失色。”〔両親がいちばん大切にするのは、自分たちが生んだ子である。小さい時にかわいがるさまは、掌に乗せた珠を見るかのようなのである。（中略）子供によいものを食べさせ、自分たちは粗末な食事をすることも厭わない。子供を湿気のない部屋に寝かせ、自分たちははじめじめした部屋にいても、“男女”が片時でも一人で寂しがついていないか心配する。洗濯しているときでも、洩垂れが不安がついていないか気にしてしまう〕（『維摩詰経講经文（一）』）などの例を挙げる。他にも“男女雖然不孝，父母未省憎嫌。”〔“男女”が親不孝でも、両親は憎んだり嫌ったりしない〕（『父母恩重経講经文（一）』）、“若說世間恩愛，不過父子情深，細論世上恩情，莫若親生男女。”〔世の中の恩愛についていうならば、父と子の情の深さを超えるものはない。世間の恩情について述べるならば、親が“男女”を生む以上のことはない〕（『八相変（一）』）などの用例がある。

また、“妻兒”“妻子”と“男女”を組み合わせた“妻兒男女”“妻子男女”の用例も各1例ある。“兄弟長辭，耶孃永隔，妻兒男女，無由再會。交期朋友往還，一別無由再見。”（『盧山遠公話』）、“緣毗耶城内，有一居士，名號維摩，他緣是東方無垢世界金粟如來，意欲助佛化人，暫住娑婆穢境。緣國無二王，世無二佛，所以權為長者之身，示現有妻子男女，在毗耶城内。”（『維摩詰経講经文』）。子供を指す“兒”“子”と“男女”が重複しているが、四字句にするために重複を避けなかったと考えられる。あるいは“兒”“子”が虚化する過程を示すものかもしれない。いずれにしても“妻兒男女”“妻子男女”は妻と子供を意味しており、「燕子賦」の“婦兒男女”も同義と考えてよいだろう。

²² 樓羅：“婁羅”“嚙羅”などとも書き、利口でやり手であることをいう。

²³ 造作：『校注』は“建造屋舍。此指造好之屋舍。”〔家屋を建てる。ここでは完成した家屋を指す〕と、『読本』は“指燕子所建築穴。”〔ツバメが作った巢穴を指す〕とする。完成したツバメの住居を指す。

- ²⁴ 耕田人打兔，蹠履人吃臙：“蹠履人”は靴を履いている人、すなわち金持ちや身分の高い人を指す。全体の意味は、他人の利益を奪って自分のモノにする、甘い汁を吸う、ということ。
- ²⁵ 古語分明：上の句“耕田人打兔，蹠履人吃臙”を“古語”〔古くから使われている語句、ことわざ〕といているが、管見の限りでは用例は見つからない。類似の表現に“赤脚人趁兔，著鞞人喫肉”〔はだしの人がウサギを捕まえ、靴を履いた人がウサギの肉を食べる〕がある。『全唐詩』卷八七六「佛書引語」、『景德伝灯録』卷十三「汝州風穴延昭禪師」などを参照。
- ²⁶ 硬努：『選注』は“形容挺出。”〔突き出ていることを形容する〕とする。拳をぐっと前に突き出す動作。
- ²⁷ 偏脱胳膊：服の片一方の袖を脱いで、肩と腕をあらわにする。片肌脱ぐ。
- ²⁸ 捺：『校注』は“揮打”、『選注』は“撃打”とする。どちらも殴る、手で攻撃する意。
- ²⁹ 且：後句が反語表現であると考え、この“且”を“況且”の意に解釈した。
- ³⁰ 嘍：『通釈』は“多；够”〔多い、十分だ〕と解釈し、『校注』もこれに従う。『選注』も“够”とし、さらにこの句では反語の語気を表す“豈夠”の意と解釈する。
- ³¹ 阿莽：『通釈』は“怎樣，怎麼樣”と解釈し、『校注』もこれに従う。『選注』も“怎麼樣”とする。『読本』は“什么”と解釈する。
- ³² 𠄎〔薛女〕斫：『校注』は“𠄎〔薛女〕”を“斲”〔切る〕の通假字とする。『読本』は“𠄎〔薛女〕斫”を“斫伐、斫杀、敲击”〔切る、斬り殺す、叩く〕とする。この句全体を、『通釈』は反語表現として、“燕子孤單，夠不上要我如何斲斫，是很容易對付的”〔ツバメは独りだけなので、私にどのようにでも殴らせるに及ばない、たやすく対処できる相手だ〕と解釈する。『選注』は“經不起我怎麼敲打”〔私がどのように殴っても耐えられない〕と解釈する。
- ³³ 更被唇口囉囉：“更被”を『読本』は“再加”〔さらに〕と解釈する。“囉囉”を『読本』は“多言”〔おしゃべりだ〕、『選注』は“竊竊私議”〔ひそひそと話し合う、陰口をたたく〕、『校注』は“私罵”〔陰口をたたく〕とする。この句全体を直訳すると、「それ以上（ツバメに）口をモゴモゴされ（て文句を言われ）たら」となり、“更被”を“再加”と解釈する必要はないと思われる。
- ³⁴ 與你到頭尿卻：『校注』に引く江藍生校は“到頭：到底、最終。二句：要是燕子再囉嗦，我就一泡尿尿了它的巢。”〔“到頭”は「最後まで、徹底的に」の意。この二句は「もしツバメがこれ以上ブツブツ言うなら、私はあいつの巢を小便でびしゃびしゃにしてやる」ということである〕と解釈し、『読本』『校注』

もこれに従う。『選注』は“從頭到腳撒你一泡尿”〔頭から足までお前を小便でびしゃびしゃにする〕と解釈する。“到頭”は他の敦煌変文でも“到底、最終”の意で使われており（『秋胡変文』の例：“正見慈母獨坐空堂，不知兒來，遂歎言曰：「秋胡汝當遊學，元期三周，可（何）為去今九載？為當命化零落？為當身化黃泉？命從風化，為當逐樂不歸？」語未到頭，遂見其子，身著紫袍，在孃前立。”〔ちょうど母親が一人で部屋に座り、息子の帰還に気づかず、嘆いているのが聞こえてきた。「秋胡や、おまえは三年の約束で遊学に出たのに、どうしてもう九年もたってしまったんだい？死んでしまったのかい、それともほかに楽しいことを見つけて帰りたくなくなったのかい？」といい終わる前に、息子が紫色の立派な服に身を包み、母親の前に姿を現した。〕）、『選注』の“從頭到腳”が適切な解釈と考える。また巢の中に小便をしてしまうと、スズメたちもそこで暮らすことができなくなるので、やはり『選注』の解釈が適切と考える。

- ³⁵ 得伊造作～與你到頭尿卻：『選注』ではこの部分をつながりのセリフとする。『校注』は“得伊造作”を地の文、次の“耕田人打兔”から“與你到頭尿卻”までをつながりのセリフとする。これに対し、『読本』は以下のように区切る。

自誇樓羅：“得伊造作。耕田人打兔，蹠履人吃臛。古語分明，果然不錯。”硬努拳頭，偏脫胳膊：“燕若入來，把棒撩腳。伊且單身獨手，嚶我阿莽□〔薛女〕斫。更被唇口囉嘴，與你到頭尿卻。”

「得伊造作」は第三人称「伊」を使っていることから、『選注』『読本』のようにスズメのセリフとするほうが自然である。また「硬努拳頭，偏脫胳膊」は『読本』のように、スズメの動作とするほうが自然だと考える。

- ³⁶ 踏地：蔣禮鴻は“蹬脚，感情激動時的動作。”〔足を踏み鳴らす。興奮したときの動作〕とし、『校注』はこれに従う。スズメに家に乗っ取られた怒りと悔しさを表す動作。

- ³⁷ 不問好惡：“不問”を“不管，無論”と考えたと、「良いも悪いも関係なく」→「良し悪しにかまわず、委細にかまわず」と解釈することもできる。『校注』は“「不問好惡」上省主語「雀兒」。上句「來」字為韻脚，故原錄於「踏地叫喚」下絕句未當。”〔「不問好惡」の前に主語「雀兒」が省略されている。前段の“來”字は韻脚である。したがって『敦煌変文集』所収の原文が“踏地叫喚”で区切るのとは当たらない。〕として、スズメの動作と解釈しており、これに賛成する。

- ³⁸ 差：『校注』『選注』によれば他の鈔本では“搥”“扱”となっており、『選注』

は『広韻』佳韻の“掬，以拳加人。亦作「搨」。丑佳切。”を引いて“掬”を正しいとする。『校注』は、徐復校に“差，變文集校改作”‘搓’是對的。”とあるのに従い、『通釈』や他の変文の用例も引用しつつ、“搓”が正しいとする。“搓”は『広韻』歌韻には“手搓碎也”〔手でもんで細かくする〕とあるが、『校注』は徐復が『集韻』皆韻の“搓，推擊也，初皆切”を引用したのを受け、敦煌変文の王梵志詩に“里正被脚蹴，村頭被拳搓。”とあることなどを傍証として、“搓”が正しいとする。『読本』は“搨”が正しいとする。いずれにせよ、「殴る」ということである。

³⁹ 聳：『校注』『選注』ともに“推”〔押す〕とする。『読本』は“攪”〔つかむ、押す〕に改めている。前段でスズメは殴りかかっているのに、ツバメと揉みあいつつ、左右の手でツバメを押し出しにかかっているのか。

⁴⁰ 剗：『選注』は“挽”〔ひねる、つねる〕に通ずるとする。『校注』は江藍生校および「伍子胥変文」の用例を引いて、やはり“挽”に通ずるとする。ここでは耳を“剗”するので、「ひねる、つねる」と解釈するのがよいと考える。

⁴¹ 搨頤：「搨」は手のひらでぶつこと。“頤”は“腮”に同じく、頬を指す。

⁴² 捻脚拽：『校注』は「伍子胥変文」の“遙聞空裏打紗聲，屈節斜身便即住。慮恐此處人相掩，捻脚攢形而映樹。”〔(伍子胥は川べりにいて) 遠くに砧を打つ音を聞き、体をかがめて音のする方向に向かう。相手が襲いかかってくるかもと、“捻脚”し木陰に隠れる〕を引いて、“捻脚”は“屈節斜身”〔体をかがめる〕であり、“捻脚拽”は“斜身使勁拖拽”〔体をかがめ、力いっぱい引く〕だとする。ツバメの足を思い切り引っぱっているさまか。

⁴³ □[齒來]：『校注』『選注』『読本』ともに“咬”〔噛む〕と解釈する。

⁴⁴ 可笑：“可笑”は「おかしい」「笑える」の意で使われる語だが、これに続く“屍骸”〔様子、ありさま〕とうまく合わないように思う。敦煌変文に“可笑”はこの箇所を除いて4例見え、うち「前漢劉家太子伝」と「茶酒論」の例は「おかしい」「笑える」と解釈できる。残り2例は「太子成道経」の“父王聞説可笑怒，聖主聞聲大・嗔，苦説萬般交處置，中心更向阿誰陳。”と「歡喜国王縁」の“王之顧念，日夕不離數（椒）房，旦暮歡於金殿。如斯富貴，可笑殊嚴。”で、『校注』は「太子成道経」の“可笑”を“〔可笑〕猶「可畏」，為甚辭。”〔“可笑”は“可畏”に同じく、甚だしいことを意味する語である〕とし、「歡喜国王縁」の“可笑”も同様に解釈する。

いっぽう“屍骸”は敦煌変文にこの箇所を除いて3例見え、うち「太子成道変文（五）」に“於是世尊垂金色臂，指魔女身，三箇一時化作老母。（中略）渾身笑具，是甚屍骸”〔そこで世尊は金色の腕を垂れ、魔女の体を指さすと、

敦煌故事賦「燕子賦」訳注(1)

三人の魔女はあっという間に老婆の姿になった。(中略) 全身これお笑い種、
なんてひどいありさまだ] とある。

これらを考え合わせると、“可笑屍骸”は“甚屍骸”と同義と考えられ、「まっ
たくひどいありさま」という意味と考えることができる。

⁴⁵ 屍骸：『通釈』は“形状，様子，含有貶意。”〔様子、ありさま。貶めるニュア
ンスがある〕とし、『校注』はこれに従う。『選注』『読本』も同様に解釈する。

敦煌故事赋《燕子赋》译注(1)

—燕子夫妻的新房被雀儿一家占领了—

Hiroyuki TAMURA

我从2015年开始在本校的语言教育研究科担任“中国文化研究”的课程。课程内容是近代汉语文献的阅读，主要是阅读刘坚编著的《近代汉语读本》中收录的文本。《近代汉语读本》是从南北朝到明代的各种文献中选出对近代汉语研究和学习有益的文献，并加上注释，其中也包括敦煌文献的《燕子赋》。在课程中，我每年都会选取这篇《燕子赋》和其他文本进行阅读。明年度起，我将不再担任“中国文化研究”的课程。因此，我想整理一下这些年来和学生们一起阅读过的《燕子赋》的笔记，并加上日语译文和译注，作为这门课程的总结。